

西洋医療と酵素医療について

医師 鶴見 隆史

■ 西洋医療の長所と欠点

(西洋医療が主流な主な理由は2つの長所)

西洋医療は全世界の主流の医療である。この西洋医療は100年以上も主流であった。いろいろな欠点の指摘される西洋医療だが、何か良いところがないとはこんなにも長く主流であり続けられるはずがない。つまり長所があるわけだ。

主流であり続けられる第一の長所は、何といっても病名診断がしっかりとつけられるということだ。採血のラボデータ、レントゲン、CT、MRI、PET、細胞診、組織診、骨シンチ、エコーといった検査によって、確実に、今どこに何の病気があるかを追い詰めることが出来る。

一体今どこが悪いのだらうと誰しもが思うのは、人間が「何故」とか「どこが」とかを知りたがる唯一の動物だからだ。その本能に的確に答えてくれる医療なのだから、そりゃ重宝されて当たり前となる。

次に、救急病や急性病に強いことが挙げられる。交通事故で足を折った時とか、意識がなくなったりなど何とかわしてくれるのがこの医療である。また、高熱を出したり、脳出血や心不全になったり脱水をしたときのような急性病にも強い。ひどい貧血の時の輸血で命が助かる場合もある。

西洋医療は、まずこの2つの大長所が存在する。私のように西洋医療の嫌いな人間でも、この2点は高く評価する。

■ 西洋医療が主流となったきっかけ

そもそも、西洋医療が主流となった最初のきっかけは、1927年、フレミングという学者が、抗生物質(ペニシリン)を発見したことにもよる。

この抗生物質の発見は強烈で、当時、不潔な地域や戦争で感染した人に使い、特効的に効いたことが発端だ。このペニシリンの威力により、薬一つで何でも治るといふ風潮が世界的に広まったのだ。その後、世界の医科学者は、薬の開発に躍起となり薬開発に奔走するようになったし、医者は薬を多用して患者を治そうとするようになった。つまり、急性病に効いたからとして、慢性病にまで手を広げ「病名診断即薬」の図式を作り上げたのが西洋医療と言える。このことが悲劇を生んだ。

診断までは、私はむしろ必要と思うし、救急病や急性病でも、この医療は欠かせないだろう。しかし問題は、慢性疾患に対しての治療と言える。抗生物質の効能に伴い、「病名診断即薬」という図式がルーチン化され、このスタイルが確立化され、西洋医学が押しも押されぬ大横綱の地位を獲得していった。もちろん大いに適用された。

昭和30年代から始まった国民総保険による診療は、この図式による治療を助長させた。その結果、どんな人でも病名診断即薬という図式が当たり前

